石川県勤文協 会報

2024 No.45

石川県勤労者文化協会

勤文協会報　No.45　目次

● 巻頭言　十一代 大樋長左衛門（年雄）…… 1

● 大樋陶冶斎名誉顧問を偲ぶ …… 2

● ２０２４年度展覧会・日程及び会場 …… 4

● 第７３回勤労者美術展　入賞作品一覧 …… 5

● 第７３回勤労者美術展　優秀作品紹介と講評

日本画 …… 6

洋　画 …… 7

書　道 …… 8

写　真 …… 9

工　芸 …… 10

● 厚生労働大臣賞受賞者喜びの声

日本画 …… 11

洋　画 …… 12

書　道 …… 13

写　真 …… 14

工　芸 …… 15

● ２０２３年度活動の記録

第５５回写真サロン展 …… 16

第５２回絵画・陶芸展 …… 17

２０２３年色写活動記録 …… 18

２０２３年度とうこう会活動記録 …… 18

● 撮影バス研修旅行報告 …… 19

● 寄　稿

詩四題　くらたここのみ …… 22

詩　孫の手　中野　徹 …… 25

小説　雨宝院詣　松井　定子 …… 26

随想　おしゃべりと文章と寄稿　西野　真理 …… 36

随想　四季を詠じて思うこと　中田久実子 …… 39

● 編集後記　鈴木　隆史 …… 42

表紙写真：千古の家「坪川家住宅」全景　福井県坂井市丸岡

ご挨拶

石川県勤労者文化協会は、県内での勤労者や退職者、またそのご家族を対象として様々な文化、芸術活動の振興を目標として活動してまいりました。

主催する石川県勤労者美術展は、アマチュアの美術展としては県内最大規模の作品展で、日本画、洋画、書道、写真、工芸と分野も広範囲にわたり、会社員として働きながら、創作活動に取り組む作家らが参加し、ここを登竜門として様々な美術展にステップアップする貴重な機会となっています。

元旦には令和六年能登半島地震が発生し、被災した人々は途方にくれる日々を過ごされています。当協会は、その人々の心に寄り添いながら、より良い事業展開を目指し、皆様と共に努力を重ねていく所存であります。

会長　十一代 大樋長左衛門（年雄）

第十回日展（2023年）出品作品
題：「大地の記憶2023　Memories of the Earth 2023」
大樋年雄（十一代大樋長左衛門）　縦48cm X 横42cm X奥行34cm

大樋陶冶斎
名誉顧問を偲ぶ

第50回 通常総会
石川県勤労者文化協会

2024年度展覧会・日程及び会場（予定）

＊震災の影響で変更される場合があります。

☆第55回石川県勤労者写真サロン展

地域受付　受　　付　４月22日(月)、23日(火)
金沢受付　受　　付　４月26日(金)、27日(土)
　　受付場所　フレンドパーク石川
［加賀展］　期　　間　５月16日(木)～19日(日)
　　会　　場　加賀市美術館
［金沢展］　期　　間　６月20日(木)～22日(土)
　　会　　場　県庁19階展望ロビー
［白山展］　期　　間　６月27日(木)～30日(日)　＊30日は表彰式・合評・作品返却
　　会　　場　市民工房うるわし

☆第１回石川県勤労者夏の美術展

地域受付　受　　付　６月17日(月)、18日(火)
金沢受付　受　　付　６月21日(金)、22日(土)
　　受付場所　フレンドパーク石川
［本　展］　期　　間　７月４日(木)～７日(日)　＊７日は表彰式・合評・作品返却
　　会　　場　しいのき迎賓館

☆第74回石川県勤労者美術展

地域受付　受　　付　12月９日(月)、10日(火)
金沢受付　受　　付　12月14日(土)、15日(日)
　　受付場所　フレンドパーク
［本　展］　期　　間　12月18日(水)～22日(日)　＊22日は表彰式・合評・作品返却
　　会　　場　金沢21世紀美術館

第73回勤労者美術展入賞作品一覧

2023年12月20日(水)～12月24日(日)
於：金沢21世紀美術館　市民ギャラリーA

第1部　日本画

厚生労働大臣賞	湖の雪の朝	伊藤　貴爺
石川県知事賞	冬の日に	村上真理子
石川県勤労者文化協会会長賞	娘と見た思い出の白山	村中　道雄
金沢市長賞	THE·KING PROTER	佐々木　智
北国新聞社長賞	草冠	小西ひろみ
北陸放送社長賞	函館立待岬	三盃象二郎
石川県議会議長賞	満月も平和を希望	前田　侑美
金沢市議会議長賞	花火	林　和枝

第2部　洋画

厚生労働大臣賞	渓流の石橋	畠中　愛実
石川県知事賞	おひるね	米沢　善雄
石川県勤労者文化協会会長賞	つなぐ	村田由美子
金沢市長賞	飛騨の鉱山	中田　正義
連合石川会長賞	緑陰の城	高木　邦雄
石川県労働者福祉協議会理事長賞	旅の想い出	金谷　久枝
北国新聞社長賞	重ねた日々	中村　瑞貴
北陸放送社長賞	あれが昴だよ	村中　達也
石川県議会議長賞	軒下のインパチェンス	岩崎　悦子
金沢市議会議長賞	峰楓映える	西井健太郎

第3部　書道

厚生労働大臣賞	三好達治詩	寺西　香月
石川県知事賞	王維詩	松本　敦子
石川県勤労者文化協会会長賞	日本百名山より	下島富美子
金沢市長賞	山頭火詩	里見　晴代
連合石川会長賞	漢詩	堀　栄子
石川県労働者福祉協議会理事長賞	政治は一瞬　方程式は永遠	土谷　節雄
北国新聞社長賞	啄木歌	木谷　吏沙
北陸放送社長賞	梅花青崦月	松任　沙月
石川県議会議長賞	舞い上がれより	京田佐恵子
金沢市議会議長賞	源道具歌	日光　里恵

第4部　写真

厚生労働大臣賞	オレンジの朝	寺田　学
石川県知事賞	轟音	網代　吉孝
石川県勤労者文化協会会長賞	千古不易	一明　政行
金沢市長賞	エンヤー	中島　睦子
連合石川会長賞	熱演	泉谷　桂子
石川県労働者福祉協議会理事長賞	いのち輝く	山元　時子
北国新聞社長賞	雪の杜	石田　福江
北陸放送社長賞	「何が見えるの?」	竹田喜代子
石川県議会議長賞	水の妖精	坂本　茂吉
金沢市議会議長賞	地域を守る	橋本　良信

第5部　工芸

厚生労働大臣賞	清水寺	加治　隆俊
石川県知事賞	浮遊	石野　晴美
石川県勤労者文化協会会長賞	野焼き	森　義隆
金沢市長賞	青波青風	盛本　立子
連合石川会長賞	笑みの君へ	西川　美紀
石川県労働者福祉協議会理事長賞	秋	髙本　隆
北国新聞社長賞	五合庵	林　滋
北陸放送社長賞	鉢カバー	由上　俊彰
石川県議会議長賞	かがやき	池田　經子
金沢市議会議長賞	優美	野村　淑恵

優秀作品紹介　日本画の部

（石川県知事賞）

冬の日に　村上　真理子

（厚生労働大臣賞）

湖の雪の朝　伊藤　貴爺

（金沢市長賞）

THE･KING PROTER　佐々木　智

（勤文協会長賞）

娘と見た思い出の白山　村中　道雄

●概　評

日本画の部　　審査員　下村　洋人・戸田　博子

今年の作品は、丁寧に書き込んだ秀作が多かったと思います。

水墨画の作品が増え、力作も多くありました。

厚生労働大臣賞の「湖の雪の朝」は、墨の濃淡の変化で水面を表現してあり、また雪の白と雪の間から墨の色調が美しく、好感の持てる作品となっています。

また、銀箔を焼く技法で色調に変化をつけて、空間を表現した作品や、大胆な構図の作品と、どの作品も表現方法に工夫されていました。

モチーフも、花鳥、風景、ファンタジーな作品と様々でした。

これからも、写生を通して作品を描き、多くの出品を願っています。

優秀作品紹介　洋画の部

（石川県知事賞）

おひるね　米沢　善雄

（厚生労働大臣賞）

渓流の石橋　畠中　愛実

（金沢市長賞）

飛騨の鉱山　中田　正義

（勤文協会長賞）

つなぐ　村田　由美子

●概　評

洋画の部　　審査員　荒木　幸子・杉村　雄二郎・浮田　正樹・大丸　七代

厚生労働大臣賞受賞作品は細部にこだわらず伸び伸びと描かれていて、ぼかしを使い少ない色数で爽やかに仕上げています。濃い木の枝に緊張感があり水彩画の良さのある作品です。

石川県知事賞受賞作品は子供の寝姿がほほえましく魅力的な作品です。体温を感じ息づかいも聞こえてきそうです。畳の目も生活感が出て、かき手の愛情が伝わります。

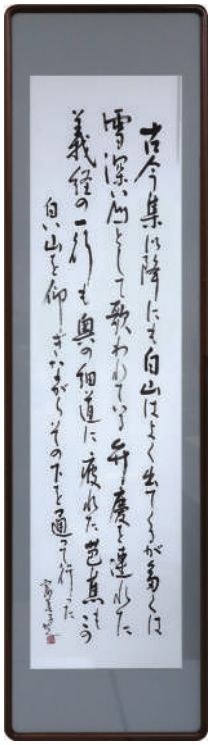
勤文協会長賞受賞作品は会場で映える色の華やかな作品です。構図も大胆で描きたい気持ちがダイレクトに伝わります。四季の中でも雪の積もった建物が全体を安定させています。

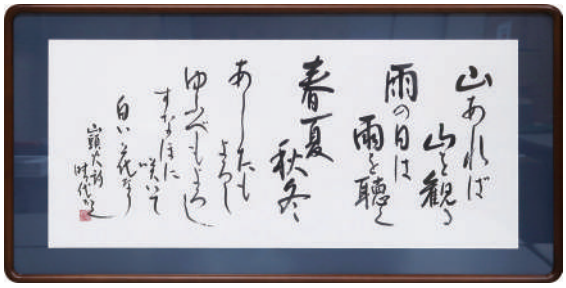
金沢市長賞受賞作品は中心の工場がシャープに描かれ、後の森や手前の緑を柔らかく表現して工場を際立たせています。知的で切れ味の良い作品です。もう少し大きい方が良かったと思われます。

優秀作品紹介　　書道の部

（厚生労働大臣賞）

三好達治詩　　寺西　香月





（金沢市長賞）

山頭火　詩　　里見　晴代

（勤文協会長賞）

日本百名山より

下島　富美子

（石川県知事賞）

王維詩

松本　敦子

●概　評

書道の部　　村上　祥赫・角　秀嶺・髙井　治

今回の出品作は、かねてより多く出品されている漢字・仮名まじりの作品に加え、竹筆で書かれた作品や単体、連綿体で書かれた作品等もあり、また、半切サイズの作品も例年より多く見受けられ、大変見ごたえのあるバラエティーに富んだ作品の数々でした。加えて、詩の選文や作品の構成なども大変充実しておりました。

ただ、多くの作品に言えることは、墨の溜まりや擦れの変化、線の太し細し、字形の変化、文字の大小、一字の中の余白等に心がけていただくことをお願いしたいと思います。

作品として仕上げるためには、相当の努力は勿論必要ですが、日頃の「習字」を怠ることなく、作成者の気持ちを入れ込んだ躍動感に溢れるような生き生きした作風が観る人に感動を与えてくれます。マンネリでなく、感性を研ぎ澄ませての新たな作品作りの挑戦を期待します。

最後に、厚生労働大臣賞受賞の「三好達治詩」は、多字数を最後までしっかりと気持ちを切らさずに集中して書いています。また、作品の構成や線質も良く、スッキリとしていながら重厚感があり、良作と言えます。

優秀作品紹介　写真の部

（石川県知事賞）

轟音　網代　吉孝

（厚生労働大臣賞）

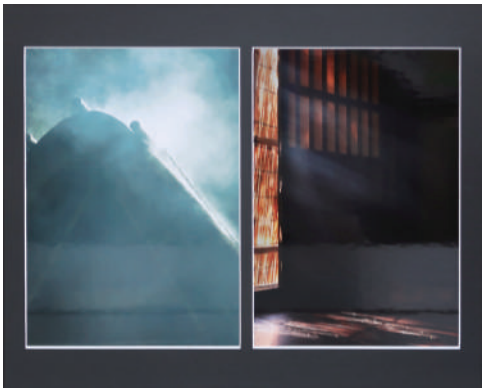
オレンジの朝　寺田　学

（金沢市長賞）

エンヤー　中島　睦子

（勤文協会長賞）

千古不易　一明　政行



●概　評

写真の部　　審査員　中川　宏治・山田　秀人・福井　節江

最高賞の寺田さんの作品は、美しい名画を彷彿とさせる秀作を久しぶりに拝見しました。色の統一性、温かい色調は格調高く、美的センスを感じさせます。

網代さんは流れ落ちる滝の瞬間を表情（模様）巧みに高速で捉えました。更に音まで感じとれ、まさに轟音です。

一明さんの千古不易は、日本に少なくなった古民家の姿を古き良き時代のものとして表現している。題材として新しくないが、何かしら気持ちが安らぐのです。タイトルがいいです。

昨年より応募点数が増え、各分野でバラエティーに富んで次回へ是非繋げてほしい。更に多数の作品が寄せられることを期待します。

優秀作品紹介　工芸の部

（金沢市長賞）

青波青風　盛本　立子

（厚生労働大臣賞）

清水寺　加治　隆俊

（石川県知事賞）

浮遊　石野　晴美

（勤文協会長賞）

野焼き　森　義隆

●概　評

工芸の部　　飯田　雪峰・辻　宏美

厚生労働大臣賞：「清水寺」　京都「清水の舞台」で欠かせないスポットを確実に丁寧に「木」の材料で緻密かつ壮大に仕上げています。

石川県知事賞：「浮遊」　工芸アートの新しい世界を押し花に感じ、いろいろな見えない技術があるだろうと想像しながら、美しい花の配色・配置に感動しました。

勤文協会長賞：［野焼き］　縄文土器の特徴ある縄文火焔型土器を手びねりで力強く又装飾豊かに丁寧に積み上げ最後は自然の火に任せての仕上げ。ストーリーを感じる作品です。

金沢市長賞：［青波青風］　細かい手びねりの作業（ひも状の土を重ねる）で仕上げた美しい作品です。大きく存在感ある作品でした。

今回の工芸部門の作品は時間をかけて制作されそれぞれの世界が広がっていることに気づかされました。これからも多くの作品に出会えることを楽しみにしています。

厚生労働大臣賞を受賞された方々のよろこびの声

厚生労働大臣賞を受賞して

伊藤貴奇
（日本画）

この度第七十三回石川県勤労者美術展において「厚生労働大臣賞」をいただき誠にありがとうございました。又マイナー的な水墨画を選んでいただき審査の先生方に感謝いたします。

ふり返れば中学生のとき、美術の先生の写生の風景画が好きでした。私も風景画を描くのが好きだったので校内や市の写生大会が有れば出品していました。その後は描くことがありませんでした。

定年後の時間の過し方を考えていた六十四歳の時（七十歳まで勤務）北國新聞で北國新聞社の水墨画教室夜の部が有るのを知り入会しました。先生は沢野井幸石様で幸墨会の主宰の方でした。又同時に幸墨会に入会しました。

初めて水墨画を描くので、先生に筆の持ち方、描き方、筆の穂先への墨の含ませ方、又水墨画に使用する筆も多く有り描き場所により適した筆の選び方を習い現在に至ります。

私は水墨画を描くには、和紙の白さと墨の濃淡を最大に生かせるのは、雪景色が良いと思い多く描いています。

又残念なのは、春の桜、秋の紅葉が墨で描くことが出来ないことです。

厚生労働大臣賞を受賞して

畠中愛実
（洋画）

この度第七十三回石川県勤労者美術展に於いて「厚生労働大臣賞」をいただき誠に感慨無量感謝の気持ちで一杯です。

ふり返りますと、私の唯一の理解者であり尊敬する兄が、よく口にしていた言葉が〝自分は画家になりたかった〟と…、数年前に癌で他界した兄を想うたびに、その言葉が私の脳裏に浮かび兄が好きだった絵を描いてみようと思うようになり、水彩画を描き始めて五年近くになりました。

写真で風景を見て描く時は、自分をその場所に身を置いて何を感じるのか感じたままを…、また旅行先での風景を描く時は、人々はここでどんな生活をしてどんな思いで生きているのか…、私がここで生きていくとどんな楽しい人生があるかなどと、その風景の中で心に感じたままを描いていますが、まだまだ技術的にも浅く未熟です。それでも今回は無謀だと思いつつ三十号という大きな絵にトライしてみたくなり、描き始めたのですが、途中で断念しかけたところ周りの方々からのアドバイスや励ましの言葉を掛けていただき、何とか最後まで描き上げることが出来ました。本当に皆様には感謝申し上げます。

日常生活に追われ中々ままなりませんが、絵を描いているその静寂の中で、自分を見つめ直し、自分探しをしている時がとても楽しくもっとこうした時間を過ごしたいと思っております。今回の受賞を励みに、ゆっくりと歩んで行きたいと思います。

最後になりますが石川県勤労者文化協会の皆様、関係者の皆様のご健勝と益々のご発展をお祈り致します。

言葉の大切さ

寺西香月
（書道）

第七十三回石川県勤労者美術展において「厚生労働大臣賞」をいただき、心より感謝いたします。この文化の盛んな土地に育ったことをうれしく思います。

小学校の頃、担任の先生に毎日、放課後お習字を教えていただきました。東京オリンピックの年「聖火」を何度も書き、賞をもらって大好きになりました。「子供らや　墨の手あらふ梅の花」（室生犀星）足洗い場で、筆を洗っていたのを思い出します。

十年余り前、勤労者プラザで、角先生に、筆の持ち方、作品の作り方、構成の大切さを丁寧に指導していただきました。毎週毎週、教室のみなさんの作品を見る事が目を肥やすことだと教えてもらい、仲間のいることの大切さ、一人では出来ないと思いました。又、氷田先生の提唱されていた漢字仮名交じりの書に出会い、言葉を味わい、日本語の奥深さを感じ、仮名漢字の調和の美しさ、筆を持つと楽しくてどんどん書くようになりました。受賞した詩は、主人が手術に挑もうとしていた時、三好達治　故郷の花の「鳶啼く」が、目に留まりました。何度も書いていくうちに力が抜けて自然体で書くことが出来ました。

書道は私を救ってくれました。病気で手足が動かなくなった時、リハビリに書道を取り入れたらどうかと言われ、書いていくうちにどんどん回復していきました。落ち込んでいた私に角先生の一言「ゆっくりやっていったら」その言葉が私の励みになりました。

「艱難辛苦汝を玉にす」を座右の銘にしています。

最後になりましたが、石川県勤労者美術展を開催していただきました関係者の皆々様に感謝申し上げます。本当に有難うございました。

出会い

寺田　学
（写真）

この度は第七十三回石川県勤労者美術展において、厚生労働大臣賞を授かり誠にありがとうございます。

入賞のハガキが届いたときは、一瞬固まり何度も読み返しました。

初めての一番にまさかの思いでしたが、嬉しさで顔が微笑んでいたと思います。

さて写真は前職がフジカラーで、もっぱらお客様が撮った写真をプリントするばかりで、自身が撮ったのは子供が生まれてしばらくと旅行に行ったときぐらいのものでした。それだけでも十分楽しかったのですが、お客様の良い写真を見ると自分もそんな作品を撮ってみたいと思うようになりました。

天気の良い日、霜が降りた日など、内勤をしながら絶好の写真日和に羨ましく思う日も多々有りました。

そしてついに定年退職し日頃も撮影をするようになると、今まで気にもしなかった道端の草花に目が行き、季節の移り変わりを敏感に感じ、四季を楽しめることが分かりました。

自然の素晴らしさを味わうことができ、また仲間と一緒に撮影に行ったり、コンテスト入賞を喜びあったりと、写真はほんとに素敵な趣味だなぁと感じます。

受賞の作品はいつも通っている道に鳥が沢山いるのを見て、早朝に出かけて撮ったものです。

ちょうど太陽が昇ってきたところに鳥を配置できました。

良い写真を撮るには、第一にねばり、それに加えて偶然の力も大きいと思います。

自分はそれを出会いと思っています。

一期一会の素敵な出会いに巡り合い、そのシャッターチャンスを逃さずカメラに納められたら最高の幸せですね。

そしてそんな写真が撮れたなら、コンテストに応募です。

出しただけで、もしかしたら入賞出来るかもとワクワクすること、またどんな作品が入賞したのかを検証することで、勉強レベルアップにつながります。

たいがいは空振りでも、また良い賞を取れるようにこれからも写真撮影に勤しみ、また楽しみながらコンテスト応募を続けたいと思います。

最後に審査員の先生方、またお世話頂いた方に心から感謝致します。

なによりの楽しみ

加治隆俊
（工芸）

今、能登半島地震のニュースを聞きながら筆を走らせています。

被災された方々を思うと胸が痛み心苦しく思うように文章が進みません。亡くなられた方にご冥福と共に被災された方に、お見舞い申し上げます。

この度、名誉ある厚生労働大臣賞を頂き、ほんとうにありがとうございます。

目標にしていたとは言え「やったー」とついガッツポーズをしてしまいました。

思えば父の認知症と向き合い、このままではいけない、何かしなければと思い立ち、校舎管理員の仕事と、その頃本屋で、宮大工の本と五重塔の断面図を見つけ、「これ作れないかな」と始めた建築模型作りでした。「図解　寺社建築」という本を何度も読み返し、材料を用意、基礎から、最初はうまくいかず何度も失敗しました。

それでも職場の方々、隣近所、妻に後押しされ、すばらしい趣味じゃない是非続けてと言われ、今では一年に一個ほどの神社仏閣の模型を作ることが出来ています。

心から「ありがとう」の思いでいっぱいです。曲げる事、組む事、一つ一つが楽しくなってくる今日この頃です。

まったくの自己流なので自信はないのですが、こうして皆さんに見てもらえるのが、なによりの楽しみと成って来ました。

正確にそして私らしく頑張りたいと思います。

関係者の皆様には、すばらしい展覧会を開催していただき、ほんとうにありがとうございます。

今後、益々の発展を祈り、受賞のよろこびとさせていただきます。

第55回 石川県勤労者写真サロン展

主　催　　石川県勤労者文化協会
共　催　　輪島市・白山市
後　援　　金沢市・七尾市・小松市・加賀市・能美市
　　第94回メーデー実行委員会・石川県労働者福祉協議会・北國新聞社
会　期　　2023年6月15日(木)～8月6日(日)
会　場　　しいのき迎賓館

表　　彰	題　　名	氏　名	自治体名
勤文協会長賞	水にゆらぐ蓮の花	髙屋　利行	金沢市
金沢市長賞	そんなに急いでどこへ行く	上田　祥吾	野々市市
七尾市長賞	早春の調べ	舟野　喜代子	金沢市
小松市長賞	雨上がり	髙垣　弘一	金沢市
輪島市長賞	水しぶきの贈りもの	室田　利洋	金沢市
加賀市長賞	黄昏の岩群	東田　利夫	加賀市
能美市長賞	萌えたつ	高村　久代	金沢市
白山市長賞	仲良しのルーティン	武藤　章	金沢市
北國新聞社長賞	美味	橋本　良信	金沢市
佳　　作	楽しいな桜並木でポーズ	松下　健児	白山市
佳　　作	一日の始まり	山元　時子	七尾市
佳　　作	跳び跳ねるシジュウカラ	中澤　直也	金沢市
招待奨励賞	雨上がり	大山　善治	七尾市

総出品数：30点

第52回 石川県勤労者絵画・陶芸展

主　催　　石川県勤労者文化協会
後　援　　石川県労働者福祉協議会・北國新聞社
会　期　　2023年9月7日(木)～10日(日)
会　場　　しいのき迎賓館

表　　彰	部　門	題　　名	氏　　名	自治体名
労福協理事長賞	日本画	リクヴィル	高桑　健一	津幡町
〃	洋画	カナディアン・ロッキー	辻　清治	野々市市
北國新聞社長賞	日本画	冬の道	林　和枝	金沢市
〃	洋画	イルカとお話ししましょう!!	畠中　愛実	内灘町
〃	陶芸	織部の象嵌壺	谷村　正子	金沢市
金　　賞	日本画	合掌造り	三原田　辰男	野々市市
〃	洋画	６月の庭先	鶴貝　桃子	小松市
銀　　賞	日本画	雪の里山	有川　明美	金沢市
〃	洋画	大雪の朝	米沢　善雄	志賀町
銅　　賞	日本画	冷たいっ！	村中　道雄	白山市
〃	洋画	葡萄	池田　經子	七尾市
佳　　作	日本画	春のはじめ	佐々木　智	金沢市
〃	洋画	老樹	畑　節子	加賀市
〃	洋画	四四南村	倉部　純子	能美市
〃	洋画	狸の歓送迎	猪谷　紫朗	金沢市
奨　励　賞	日本画	ひとり静か	黒田　美智子	内灘町
〃	洋画	インコのペルちゃん	中山　佳子	金沢市

総出品数：60点

2023年 色写(写真教室)活動の記録

☆写真教室（色写）

講師　中川宏治　勤文協顧問（審査員）

1．撮影会

実　施　日	撮　影　先　等	人数(色写)
2月19日	羽咋市　一の宮海岸、志賀町　大島海岸	8人
4月　8日	小矢部・稲葉山の桜、宝達志水町方面	6人
5月14日	第19回白山麓自然写真塾に参画	7人
9月　3日	津幡町八ノ田の棚田方面	6人
10月17日	加賀立杉峠～県民の森～久谷湖	6人

2．作品研究会（2023年）

3月7日、4月22日、5月31日、9月14日、11月8日の5回

3．会員数

9名（2023年12月31日現在）　＊男6名、女3名

2023年度 とうこう会（陶芸教室）活動の記録

☆とうこう会（陶芸教室）

場　所　フレンドパーク石川

講　師　飯田　雪峰　北陶代表　勤文協顧問

北村　鶴代　日展会友　勤文協役員

教　室　年間24回（月2回）毎月原則として第2・4水曜日

会　員　3名

＊諸般の事情により本年度をもって活動を中止します。

越前一乗谷方面をめぐる撮影バス研修旅行

鈴木隆史
（勤文協事務局長）

二〇二三年十月三十日、絶好の秋晴れの下、総勢二十七名の撮影バス研修旅行参加者は、このバス研修としては久しぶりの福井方面へ向けて出発しました。ご承知の通り勤文協のバス研修旅行は毎年スケッチ部門と写真撮影部門を交互に実施しています。今年度は写真の中川顧問が事前に下見を兼ねて、しばらく訪れていない福井方面を目的地にしようと選んだのが、今回の一乗谷朝倉氏遺跡でした。

金沢西ＩＣから北陸高速に乗り、尼御前ＳＡでの休憩を挟んで、福井ＩＣを下りて最初の撮影地点は、佐々木小次郎が修行場とし、秘術「燕返し」をあみだしたとされる一乗谷の最深部「一乗滝」です。落差は十二メートル程度で、それほどの高さがあるわけではありませんが、ここしばらくの天候のせいもあるのか水量が豊富で、参加者は三脚を立て、あるいは岩場に這いつくばるようにして激しい水の流れの瞬間をとらえようとする姿が印象的でした。

次に訪れたのは、一乗滝から流れ下った一乗谷川流域に広がる「一乗谷朝倉氏遺跡」でした。実は筆者自身は当地を訪れるのは初めてであり、その名前は知ってはいましたが、これほど規模が大きく、また当時の町並みが現在も復元されつつあることも含めて、金沢城公園などとはまた違うリアリティを感じさせる史跡でした。

私自身はスマホのカメラで気に入った被写体をいくつか記録する程度ですが、この研修旅行の参加者は、私はまだまだ初心者で、と自己紹介される方が多いものの、持ち込んできた装備類は、やはり他の一般観光客とは一線を画すものがあります。

写真愛好家と呼ばれる人たちが、こうした広大な史跡群の中で、どこに焦点をあててシャッターを切るのか、写真とは

無縁の筆者にとっては、むしろ参加者がどこにカメラを向けているのかが興味深く感じられました。

最初に訪れた一乗滝、そして最後に訪ねた千古の家「坪川家住宅」とは違った、広大さ故の的の絞り込み辛さが、こうした遺跡群のような被写体にはあるのかもしれないなどと素人なりの思いを巡らせながら、参加者がカメラを向ける先を観察していると瞬く間に時間は過ぎ、遺跡群からほど近い昼食会場の道の駅「一乗谷あさくらみずの駅」へと向かいました。福井と言えば、特に深く考えることもなく定番のソースかつ丼とおろし蕎麦のセット定食を選択したのですが、正直なところ、二十代の若者グループならともかく、我々の年代にはちょっとボリュームがありすぎたというのが率直な感想です。事実、ソースかつ丼持ち帰り用の容器を要望される方が少なからずいらっしゃったので、今後の反省材料にしたいと思います。

道の駅でお土産の調達も済ませた一行は、最後の目的地である坂井市丸岡の千古の家「坪川家住宅」へと向かいました。ここも私にとっては初めての訪問ではありましたが、二年前の晩秋の五箇山合掌集落撮影研修も含めて、茅葺屋根の古民家自体は目にする機会がないわけではありません。しかし、この千古の家は合掌集落のように決して大きな家ではないものの、入母屋風の異様に重厚な屋根のたたずまいが特徴的であり、建物の中に入ると囲炉裏から立ち上る炎と煙が決して広くはない建物内を満たし、否応なくこの建物の歴史を物語ってくれます。参加者も数百年の煙に燻された硬くて真っ黒な栗の木の柱や梁、そして天井、ピカピカに磨き上げられた床を眺めながら、窓から差し込む西日に照らされた屋内の様子をとらえるべくしきりにシャッターを切っていました。

およそ現代風の快適さとは程遠い、しかし圧倒的な存在感と、原初的な感覚を否応なく呼び覚ますこの建物には正に魂が宿っているかのような、古木老木にも似た生き物の息遣いが感じられたのは筆者一人ではないと思います。おそらく参加者がとらえようとしていたのも、単なる古民家の風情だけではなく、この建物の歴史、醸し出される情念のようなものではないかと推察しながらひとときを過ごしました。

つるべ落としの夕陽に急かされるようにして、すぐ近所に有名な油揚げがあるよとの参加者の一言で急きょ油揚げ屋に立ち寄り、一斉に買い求めた後は一路金沢を目ざして無事に今年度の撮影バス研修は終わりました。

詩四題

詩　くらたここのみ
挿絵　中山絵理

からくり人形

からくり人形
茶運びさん
体は木製
ぜんまいじかけ

どなたが作って
くださいました
大野弁吉先生
ですか

茶運び人形
からくりさん
肩衣袴に
ちょんまげ姿

どなたにお茶を
さしあげますか
小さなお盆に
お茶碗のせて

花の薫(かお)り

花が咲いてるよ
近くに咲いてるよ
見えなくても咲いてるよ
きんもくせいの花
どこかに咲いてるよ
花が薫るから
やさしく薫るから
朝の風に薫るから
張(は)り子(こ)の虎(とら)もほら
しずかにうなずくよ

このぼうし

このぼうし
にあうかな
猫にきいたら
にぁう　にぁう
ほんとうに
にあうかな
犬にきいたら
にゃわん　にゃわん
にあう　にあわん
どっちかな
からすにきいたら
かぁこいい　かぁこいい
すずめにきいたら
ちっちっちっとも　ちっちっちっ

おはようの　うた

おはようおはよう　お　は　よ
学校へゆく道々(みちみち)で
出会ったどうしが　お　は　よ
朝の光は美しい
朝の心にかがやかせ　お　は　よ
これを言ったら気が晴れる
げんこつタッチもいい感じ

おはようおはよう　お　は　よ
公園のかど並木道
ばったり出会って　お　は　よ
朝の空気は新しい
朝の体にすいこんで　お　は　よ
これを言ったら気が和(なご)む
笑顔がふえてく転校生

詩

孫の手

中野　徹

今日は孫の幼稚園の運動会
ジジババ揃って朝から応援
園庭にはパパママ　大勢の園児たち
張り切る孫は「がんばれ」の声に
かけっこの外枠からゆったりと手を振る
そのせいかビリでのゴールイン
どうであれ　孫は可愛い

孫の俳句や詩は甘ったるくて
ご法度と言われる
こちらは　プロでも無いので
可愛さ100倍　どんどん作る
駄句や駄詩ばかり
うず高く　天まで届けとばかり作る

背中の奥深く　手の届かないところで
何かが貼りつき　痒い
百均で孫の手を買う
干からびた手をそろりと入れ
もどかしさにイラつきながら
へばりついた〝ことば〟を剥がす
消費された孫ということばが
恥ずかしくて　逃げ出し迷い込み
べたべたと貼りついたらしい
幼い子の俳句を詠むに長けた
一茶の句を思い浮かべる
〝雪とけて村いっぱいの子どもかな〟
名句が　諦めることなかれと
優しくこちらを見つめている

小説

雨宝院詣

松井定子
（金沢市）

雪は一夜にして二十センチほども降り積もった。車が一台通れるほどの狭い道路をはさんで三十軒ほどの民家が廂を並べている。

どの家の瓦屋根にも綿帽子を被ったようにふんわり積もっている。幸江（さちえ）は窓から雪を珍しいものを眺めるようにしていた。が、玄関の引き戸を思いきり開けると、雪は風を伴って吹き込んだので慌てて赤い綿入れ半てんの襟元を掛け合わせた。

ああ、面倒なことは何もかも雪の中に埋もれて消えて欲しい。幸江は見慣れた町が純白な世界に変わっていく様子を飽かず眺めていた。

そのとき、

「寒い場所にいつまで立っているんだい」

母の甲高い声がした。

「雪をじっと見ていると、なぜか引き込まれ元気が出てくる気がするの」

「おかしな子だね。そういえば、幸江が生まれた日も、今日のように雪嵐だったよ」

「そうだったのね。雪の降る日の……」

「幸江は色の白い子でね。亡くなった父さんそっくりだった。生まれ変わりと思ったよ」

幸江は雪を眺めながら母の話を聞いていた。「父さんの顔は写真で見ただけで、色が白かったかわからない。今まで色が白いと言われたことはないけど……」

そう言いながら居間に来た。六畳ほどの和室の角の壁にテレビがある。正面の柱には旅先で買い求めた布製の状差があり、封書やハガキなどが入っている。部屋の真ん中に正方形の炬燵がある。左天井に小さな神棚がありその真下に置いてある台の上に黒い固定電話がある。その横に反射型石油ストーブが部屋を温めていた。

「幸江は今年、三十歳になるんだね。今年こそは良縁がありますようにと、神棚に手を合わせているのだよ」

「よけいな心配はしなくていい」

「このところ、日曜日になっても家にいることが多いけど、一郎さんとはどうなっているんだい」

「・・・」

幸江は今年も母と二人だけの正月を過ごしていた。市内の図書館で仕事をしている幸江は一月五日まで休みだった。

「幸江は切り餅をいくつ食べるのかね。子どものころは年の数だけ食べていたよ」

「一つだけ……」

「たった一つだなんて元気がでないじゃないかい」

そう言いながら、台所で準備している母は父の亡き後、調

理師として小学校の給食を作って働いている。
幸江は母に早く花嫁姿を見せてやりたいと思っているが、このまま一人のほうが気楽でいいと思う気持ちもあった。
幸江は子どものころ、サンタクロースと結婚したいと思っていた。
面長で目が細く、髭を生やして微笑んでいるサンタクロースが幸江の父親に見えたのだ。
今、交際している一郎は川柳の会の会員で幸江も同じ川柳の会に入っている。
一郎が川柳の会に入ったきっかけは、金沢に住んでいたころからの親友で五、六歳ほど年上の人だった。その人も川柳の会員で、月一回の例会に神奈川県から訪れる一郎を誰よりも心待ちにしていた。例会は幸江の仕事をしている図書館の一室で行われていたこともあって、一郎より先に幸江は会員になっていた。一郎と初めは挨拶するだけで話をすることはなかった。
ところが、ある日、一郎から川柳の話がしたいからと、いきなり誘われた。
それから何回会っただろうか。
一郎を好きでも嫌いでもなかったが誘われるたびに話をした。
幸江と年齢が一回り離れている一郎は背が高くて体もがっしりとしている。黒縁の丸眼鏡をかけ、口髭を生やしているので近よりがたく見える。だが、おもしろいことを言って幸江を笑わせることがある。そんなわけで、一人でいるよりも一郎と話をすることが嫌ではなかった。一郎の話によると、子どものころ、家族で金沢に住んでいたらしい。父親が早く亡くなり、母親は再婚をした。しかし、一郎は新しい父親と気が合わず争いばかりしていた。そのため、中学卒業後、神奈川県の土建会社で働いているという。
幸江と会うときには、犀川の川辺の柳の木の前の木造の古めかしい喫茶店だった。
幸江と向かい合って座っている一郎は眼鏡越しから、
「幸江さんのことを以前から気になっていました。あなたが川柳の仲間がおもしろい話をしたとき、にっこりと笑った顔が心に残っています」
と、やさしいまなざしで言った。
「そんなことは忘れていました」
幸江は、はにかむように言った。
「幸江さんといるだけで不思議な力を感じるのです」
「神がかり的なことは言わないでください」
幸江は一郎の言葉に一瞬、びっくりした。
なぜ、一郎がそう感じるのかよくわからない。だが「不思議な力を感じる」と言われて内心嬉しかった。
喫茶店を出てから一郎と犀川の河川敷をゆっくり歩いた。
初秋のころで川面から吹く風は心地良かった。
「かなり前になりますが、付き合っていた女性と旅をしたことがあってね。川辺の小さな宿に泊まったのです。夜、川風に吹かれながら歩いたのです。
ふと、川面を見たら、女性の顔が、川に映るネオンの光に

映ったのです。その光景にぞっとしたのです。別人のように豹変したからです」
一郎は絞り出すように言った。
川面から吹く風に幸江の肩までの髪が揺らいでいた。
「その女性はそのあと、おれから離れていったのです。理由はわかりません。おれはいつも女性のほうから身をひくようにいなくなるのです」
一郎の話にどう返事をしたらいいのかわからず頷くだけだった。
「幸江さんは口数が少ないですね。おればかり、しゃべり続けているようで……」
「お話を聞いているほうが好きなのです」
「幸江さんも話をしてください」
一郎は立ち止まると幸江の方を向いて微笑みながら言った。
幸江は一郎の言葉に心が揺らいだ。
「川風に吹かれていますと話したくなりました。夏の川の泥臭い匂いがなんともいえないほど……。風がピタッと止むとき願いを託したくなるのです。
『かぜになりたや　はつなつのかぜになりたや……』と、好きな版画に彫り込まれていた言葉です。
「それで、風に何を託すのですか」
「一郎さんは話をさせるのが上手ですね」
「おれは幸江さんのことが知りたいのです」
その言葉に幸江は立ち止まった。そのとき川風が一瞬強く吹きつけると髪が乱れた。
「人様にお話しできるようなことではないのです。たわいないことです。子どもじみた内容で笑われるかもしれませんが……。
父は、私が生まれる前に病気で亡くなりました。私は子どものころ、川に落ちたのです。溺れかけている私を助けてくれたのは死んだ父ではないかと今も信じているのです。ですから、風になって父に会いたいという願いです」
幸江は話し終えると、ほっと息をついた。
一郎はゆっくり歩きながら聞いていた。
川の遠くに医王山などの山々が連なり、川面は初秋の陽が輝いている。対岸には柴犬を連れて歩いている人がいるだけで、長閑な風景に包まれていた。
「幸江さんの話に思い出したことがあります。おれの記憶の底に溺れかけている女の子を助けてやらなかったことが脳裏に浮かびます。幸江さんと目に見えない所でつながっている気がします」
「幸江は何を考えごとをしているのだぃ。餅が伸びてしまうよ」
母は急かすように言った。
「私が川に落ちたときのことを詳しく聞かせてほしいの」
「いまごろ、何を言い出すんだい」
川を懐かしくさせるのは、子どものころ、川に落ちたことがあったから、もしかしたら亡くなった父は病気ではなく川に落ちたのかもしれない。幼いころから、川の側にしゃがん

でじっと眺めていることが好きだった。
「川に呼ばれている」、いつもそんな気がしていた。
川に落ちた日も幸江は川を覗き込むようにしていた。渦巻いて流れる川に吸い寄せられるように体が軽くなったと思ったら仰向けになって川に抱かれるように流された。
あのとき、通りがかった若い男の人が川へ飛び込んで助けてくれたことを後で聞いた。
幸江は遠い日の記憶に、その人は亡くなった父ではなかったのかと思うことがある。
小学生のころ、母と手をつないで歩いていたときのことである。ゴウゴウと裏通りの用水があふれんばかりに流れる音に、幸江は母の手を振りはらって走り出した。
「危ないよ」
母は驚いて追いかけてきた。
川の水は雨上がりの後で淵いっぱいにあふれんばかりに流れていた。うねるように流れる川を見ていると、亡くなった父がいるような気がして飛び込みたくなる。白い泡を吹き上げながら渦巻く川に急きたてられるのである。
橋の下あたりが激しく飛沫がかかっていた。
それでも身を乗り出して覗き込んでいた。
見ている幸江の体も流れと同じ速度でグルグル渦巻き宙を舞っている、そんな感じに襲われた。
そのとき、〝幸江幸江〟と父の声がした。
父の声など覚えているはずもないのに、その声は父だとはっきりわかった。
幸江が橋の手すりから擦り抜けようとしたとき、幸江の体はもぎ取られるように強く引き寄せられた。
気がつくと、幸江は母の胸に抱かれていた。
それからというもの、母は幸江の姿が見えないと、ドキッとして命が縮んだ、と事あるごとに言っていた。
「幸江は川に落ちたことがあっても、いつも川の側に行って見ていることが好きな子だったよ」
母は思い出すように言った。
「川を眺めていると、死んだ父さんが、幸江って呼ぶ声が聞こえる気がするの」
「そんなことあるもんか。気のせいだよ」
「川の側にいると癒されるの。川の近くに住みたいと思うことがあるわ」
「川の側の家は嫌だよ。幸江が川に落ちてから、川の近くに行くだけで身が縮むよ」
「父さんは何の病気だったの?」
「風邪が長引いて肺炎になって死んだのだよ。いまごろになって、どうしてそんなことを聞くのかい」
「私は、父さんが川に落ちて死んだのかもしれないと思うことがあるの。川の側にいると父さんが〝幸江幸江〟と呼んでいる声がしてくるの。母さんは気のせいだと言うけど、魚になって滑り込んでみたくなるの。どうしようもなくなるの」
「何を言い出すのだい。魚になりたいなんて命が縮むようなことを言うんでないよ」
幸江は母の命を縮めようとしているわけではないが川に呼

ばれている気がするのである。
居間の茶箪笥の上にハガキ大の額に入った父の写真がある。写真の顔をじっと見ていると、以前、読んだ短編小説のことが鮮明に浮かんだ。
―愛し合っていた夫婦がいた。ある日、突然に夫が理由もなく鉄道自殺をしたのである。
妻は死んだ夫のことを考えても自殺したことがわからない。
その小説には、本人もわからない何かに憑かれて理由もなく死にたくなることがあるものだと記されていた。
もし、父が川で死んだとしたら、その小説の男のように何の理由もなく死にたくなったのだろうか。

一月三日の夜、一郎から電話があった。
「今日の夕方に金沢へ来ました。明日、幸江さんと会いたいのです。都合がよかったら、いつもの柳の木の側の喫茶店で十一時ごろに待っていてください」
「はい」
幸江はそう返事をして受話器を置いた。
翌日は雪が降っていた。幸江は約束の時間に行ったが一郎の姿はまだなかった。
ウェートレスに後でもう一人来ることを伝えてから窓側の席に座った。
窓から柳の木のしなやかに伸びている枝に雪がふんわりとかかっていた。
一郎は金沢に泊まるときの宿は、いつも同じ宿らしいが、幸江は宿の名前は聞いてはいなかった。
いつだったか、一郎は宿で食べた「煮凝り」の話をしたことがあった。
「おれは子どものころ、魚の煮汁が冷めて固まったものを温かいごはんにかけて食べるのが好きだったのです。金沢に泊まる宿でも、煮凝りを出してくれるのです」
幸江も食べたことがあるが〝煮凝り〟という言葉を一郎から聞いたことは意外だった。
一郎の泊っている宿は犀川の下流らしい。
この喫茶店は犀川の上流のほうにあるので歩いても時間がかかる。
幸江は降る雪を眺めながら一郎のことを思い出していた。一郎は金沢から神奈川へ行ってから何十年も経っている。母と再婚した父と妹は金沢に住んでいた。その後、母が父と別れてから、母と妹は神奈川に来たが一郎は母や妹と会うことは少なかったらしい。
「おれは十五歳で金沢を出て神奈川に行ったけど、思い出すのは金沢なんです。金沢の三文豪といわれている室生犀星の『小景異情』の詩は心に染みています。
〝ふるさとは遠きにありて思うもの　そして悲しくうたうもの……〟
一郎は金沢に訪れると、いつもきまったように犀川のほとりを歩きながら、子ども時代を懐かしんでいた。
一郎はまだ喫茶店に来ない。何かあったのだろうか。携帯電話もそれほど普及しておらず、お互いに携帯電話を持って

いなかったし、宿の名前や電話番号もわからないためどうすることもできなかった。
気持ちを落ちつかせるために紅茶を頼んだ。
しばらくしてウェートレスが湯気の立った紅茶を持ってきた。
紅茶を飲みながら不安な気持ちが募っていく。そのとき、一郎が慌てるようにやって来た。手に旅行鞄のようなものを持っている。「待たせたね。出がけに神奈川にいる妹から電話があって、子宮筋腫の手術をして入院しているらしいんです。妹と久しく会っていないのですが、何かあった時のために宿の電話番号を知らせてあったのです。幸江さんと約束していたのに申し訳なく思います。今度、金沢に来たときには、その分、ゆっくりとお会いしたいと思います」
一郎は詫びるように言った。
「私との約束はいいのです。早く妹さんの所へ行かれたらよいと思います」
一郎はウェートレスにコーヒーを頼んだ。
「妹は母と暮らしていましたが、5年前に母は病気で亡くなったんです。おれは十五歳で家を出たので妹と暮らした期間が短いんです。
妹は一度、お見合いで結婚しましたが子どもができなかったことを、顔を見るたびに姑に言われたことで精神を病み、別れました。
妹に何もしてやれることができなかった。
妹から、その話を聞かされると、本当にやりきれない気持ちになる……」
幸江は黙って一郎の話を聞いていた。
「妹さんは一郎さんを頼りにされておられるようですね。私は兄妹がいませんのでうらやましいです」
「兄妹といっても子どものころから離れて暮らしているので、何か変わったことがあるときに連絡するだけです。
以前、おれが入院したとき、妹は下着などを持ってきてくれました。
母が亡くなった時、妹はおれと暮らしたいと言ったんです。同じ神奈川に住んでいましたが、今さら妹と生活することはできませんでした。いま思えば、妹と暮らしたほうが互いによかったのかもしれませんが……
おれの話ばかりで申し訳ありません」
「いいんです。お話をしてください」
「幸江さんに聞いてもらって心が楽になりました。幸江さんも何かあったら話をしてください。今度、金沢に来たとき、幸江さんと犀星の育った雨宝院に行きたいと思います」
幸江は頷いた。幸江も犀星の詩や小説に興味があり、雨宝院を訪れたことがある。
「ご一緒できる日を楽しみにしています」
「おれは犀星の詩が好きです」
そう言いながら鞄から掌サイズの詩集を取り出した。
「以前、幸江さんに話をした『小景異情』の〝ふるさとは遠きにありて思うもの……〟が気に入っています。子どものころ過ごした金沢は心のふるさとになっているんです」

「私も犀星の詩が好きです」
「犀星の詩が好きな幸江さんを妹のように思っています」
「そう言ってくださると嬉しいです。私も一郎さんを兄さんのように思っています」
「幸江さんに一度、神奈川に来てほしい」
「ありがとうございます。その日を楽しみにしています」
「今日は一人で妹の所へ行ってきます」
そう言うと、一郎はコーヒーを一息に飲んだ。
「駅までお見送りします」
「悪いなぁ」
一郎と幸江は喫茶店を出ると大通りのバス停まで歩いた。
雪は止んで青空が出ていた。
「おれが子ども時代に住んでいた所は裏通りの狭い小路の長屋でした。その一隅に暮らしていました。昔からの町だったんで神社があって祭りの日は露店が出て賑やかでした。犀川も近くにあって、夏には泳いだこともありました。いつか、幸江さんに、おれが以前に住んでいた場所を案内します」
一郎は、バスが来るまで子どものころの話を懐かしむように話をしていた。
やがて、やって来たバスは正月のせいか混雑して座る場所もないほどだった。
正月に一郎を金沢駅まで見送ることは初めてだった。けれど、一郎となら満員バスに乗ることも楽しいと秘かに思っていた。
正月の駅は人も多く、大きな旅行鞄を持っている人や友人や家族を迎える人で賑わっていた。
一郎が切符を買っている間に「福梅」一箱と籠入りのミニチューリップを買った。
幸江は自分の代わりにお菓子とお花に託したのである。
後から入場券を買って一郎の側に行った。
「これ、妹さんに差し上げてください」
そう言って、幸江は手渡した。
「幸江さんに気を遣わせて申し訳ありません。妹も喜ぶと思います。ありがとうございます。
あと十分ほどで汽車が来ますのでホームへ行っています」
一郎の後から幸江は急いで行った。
「幸江さんからホームまで見送ってもらって嬉しいです」
一郎は顔を綻ばせた。
しばらくして、汽車がホームに滑るように入ってきた。自由席は空いているようだった。
「それじゃあ行ってきます」
一郎はデッキから幸江に言った。
幸江が手を振ると、扉が閉まり汽車はゆっくりと走り出した。
赤いチューリップの花が一郎の胸に小さく揺れていた。幸江は汽車が見えなくなるまで見送ってから駅をあとにした。
幸江の体は呪文をかけられたように足が地につかないほど気持ちが昂っていた。
こんなことは初めてだった。
一郎の笑顔を想い出していた。

雪がまた降ってきた。空を見上げると、声のない雪の言霊が幸江に降りそそいでいるようだった。
一郎の乗った汽車はどのあたりを走っているだろうか。そう思いながら幸江は家に帰るためバス停に並んで待っていた。
そのとき、ふと、途中下車して雨宝院に行ってみよう、という考えが浮かんだ。
一郎といっしょに初詣はできなかったけど、いや、だから私一人でも行ってみよう。
片町で降りて、犀川大橋を渡って右に折れると雨宝院がある。門の左側には赤い頭巾姿のお地蔵さまが出迎えてくれた。境内に入ると着物姿の若い女性たちがお参りをしていた。
以前、訪れたころは秋だった記憶がある。
私はお参りをしたあと、本堂の横にある玄関のチャイムを押した。
しばらくして、着物姿の奥様が出迎えてくださり、
「去年、この寺に来てくださった方ですね」と、にこやかに話された。
幸江は自分のことを覚えていてくださったことにお礼を言った。
「さあ、さあ、お上がりください。今から住職のお経がはじまります」
奥様は愛想よく、幸江を本堂に案内した。
そこには、五、六人の客が座っていた。
幸江は、うしろのほうに座った。線香の匂いが立ち込める中、お経が始まった。

幸江は心の中で一郎の妹さんが回復されることを祈っていた。
住職は護摩壇でヌルデの材の護摩木を何本も燃やして神仏に祈っていた。
やがて、お経が終わると住職は、
「本日は正月ですので皆様のご多幸を願いまして祈祷いたしました。
このお寺は詩人で小説家の室生犀星氏の育った所です。いま、寺の一室に犀星氏の遺品やコートなどを陳列する場所を作る話が犀星氏の長女の朝子さんのほうからでています。
遺品室が完成しましたらぜひお越しください」
と話された。
（遺品室は一九九七年九月完成）
幸江は以前、雨宝院に訪れたときのことを想い出した。
住職の奥様から、ガラスケースに入っている犀星の遺品を見せてもらった。
そこには、当時、雨宝院の山門を新しくした時に（昭和二十八年）、東京の馬込に住んでいた犀星から、二万円の金を毎月千円ずつ速達で送られて来た封書が何通もあった。
その横に犀星氏直筆の色紙もあった。
〝わがやどは馬込の里のやぶなかに　ともしぶともれ　さぶしとおもはず〟と記されていた。犀星の馬込の庭は自然で藪を好んでいたことも聞いた記憶がある。
「今日はありがとうございました。遺品室の完成を楽しみにしています」

と、奥様にもお礼を言って寺をあとにした。
幸江は雪も止んだ空を見上げながら、一郎の乗った汽車は今ごろは越後湯沢あたりだろうかと思いめぐらせていた。
遺品室ができたら一郎と雨宝院に訪れたい。
犀星の詩集を好んでいる一郎は「性に目覚める頃」などの小説も読んでいることだろう。
幸江は雨宝院の奥様から聞いた〝朱塗りの賽銭箱〟の話を思い出した。
「朱塗りの賽銭箱ですが犀星先生の『性に目覚める頃』に出てきます。
当時、賽銭箱は本堂の入口階段の手前に置いてありました」と指をさされた。「そして、お堂の間に敷居があって、大きな格子戸がありました。今、格子戸は片隅に片付けてありますが、そのころは格子戸に煤けたおさる子人形が一つ二つ括り付けられてありました。
おさる子人形は朱色が女で白色は男なのです。二体の人形が背中合わせにしてあるときは別れる意味があるそうです。抱き合わせにしてあるときは添いたい意味があるそうです。
人形のお腹のところに、二人の名前を書いて祈願するそうです。
このお寺の近くに遊郭がありましたので女の方のお参りが多かったようです。
先代の住職は『寺の門に入ってくる人を大師匠さんと思いなさい』と、話しておられました」
奥様は当時のことを懐かしむように話された。

幸江は雨宝院のおさる子人形の話に心がひきつけられた。いつの日か、おさる子人形に思いを託せるような情熱的な恋ができるだろうか、幸江は、そのときはまだ見ぬ恋に思いを馳せていた。
幸江は家に帰ると緊張がほどけて疲れた。
「一郎さんと初詣して楽しかったかい」
母は嬉しそうに幸江に言った。
「うん、まぁね」
幸江は言葉少なに言った。
「嬉しそうじゃなさそうだね。何かあったのかい」
母の言葉は、今日は煩わしかった。
幸江は一人になりたくて二階の自分の部屋へ行った。ベッドに横になったが眠られず、今日の出来事を思い出していた。
一郎と喫茶店で会った後、金沢駅まで見送ったことや雨宝院に訪れたことなど、短い時間に思ってもみなかったことばかりが立て続けに起こった。もし、縁あって一郎と結婚したら、毎日が予想しないことばかりなのだろうか。そうなったとき、乗り越えられるのだろうか。新たな不安が湧いてきたが、そうこうしているうちに眠ってしまったようだ。
どれくらい寝たのだろうか、カーテンを開けると日はとっぷり暮れていた。心と体はすっきりした。
一郎さんは妹さんの病院に着いただろうか。そう思いながら階下に来た。
「幸江の起きるのを待っていたのだよ」
食卓には幸江の好きな〝治部煮〟があった。

「食べたかったの。母さんありがとう」
大ぶりの椀には、しいたけやすだれ麩、竹の子、ほうれん草、鶏肉などが入っておりワサビも添えてある。
「幸江が疲れている様子だったから元気になるように作ったのだよ」
「母さんの治部煮は一番おいしいね」
幸江は一口、ひと口かみしめるように味わった。
一郎さんにも、治部煮を食べさせてやりたい。
「いつか、治部煮の作り方を教えて欲しいの」
「そうだね、幸江が嫁入りするまでに教えてやるよ」
母は嬉しそうに目を細めた。
夕食を終え、母とお茶を飲んでいると、居間の電話が鳴った。一郎さんかもしれないと幸江は急いで受話器を取った。
「幸江さん、今日はありがとうございました。病院の公衆電話からかけています。妹は手術の経過もよく、数日で退院らしいです。幸江さんからのお菓子やお花を妹は子どものように喜んでいました」
一郎は明るい声だった。
「妹さんが元気になられてよかったですね」
幸江も嬉しかった。
「それから、妹が幸江さんに会ってお礼が言いたいと言っていました。今度、おれと一緒に神奈川に来てほしいのです」
一郎の言葉が幸江の胸のうちで温かくふくらんでいく。
「はい、私も妹さんとお会いしたいと思います」
と、答えて受話器をそっと置いた。

側にいた母は、
「やっぱり何かあったんだね、一郎さんの妹さんがどうしたのだい」
と、心配そうに聞いてきた。
幸江は今日の出来事を母に話した。
「お見舞いに行かなくてもいいのかい」
と、母は言った。
「一郎さんと相談して決めるから母さんは心配しなくてもいいのよ」
幸江は今まで、事あるたびに母と話し合ってきた。けれど、このごろは一郎を頼りにするようになっていた。
「幸江が一郎さんと縁あって結婚してくれることを願っているんだよ。でも、神奈川に嫁いだら会いたくても、なかなか顔が見られなくなるね」
母は寂しそうな顔をした。
「結婚するかどうか、先のことはわからないわ。明日、母さんと久しぶりに町内の氏神様に初詣に行かない？」
幸江は、しょんぼりしている母に言った。
「そうだね、明日は雪も止んで晴れそうだから行こうかね」
母はすぐ笑顔になった。声も明るい、いつもの母の声だった。

随想

おしゃべりと文章と寄稿

西野真理

幼い頃から面倒なことの大嫌いだった私は、文章を書くのがとても嫌いでした。小学校の時の作文の時間がどんなに嫌だったか。しかし、今思い返してみると、文章を頭の中で作ることそのものが嫌だったのではなく、文章を推敲する際に、例えば五文字減らしたいときに、そこだけ消しゴムで消すのではなくて、その先も全部消さなくてはいけない、そういう面倒なことがとても嫌だったのです。

大人になっても作文嫌いは続きましたが、就職して何年目かに「ワープロ」が現れました。「ワープロ」の出現によって推敲する際の消したり追加したりの煩わしさが消滅。つまり、書くことの「面倒」という部分からは開放されることになりました。

そんなある日、たまたまこんな会話を耳にしました。

「生徒たちはどうしてあんなに作文を嫌がるのかしら。おしゃべりはあんなに上手なのに。おしゃべりをするように書けばいいのに」

「おしゃべりをするように書く！」

この言葉を聞いたことが私の人生を豊かにしてくれることになりました。

私はおしゃべりが大好き。放っておいたらいくらでもしゃべります。それをそのまま文章にしていいのなら、こんなに楽しいことはありません。

そこで早速、家族や友人にしゃべった身の回りの出来事を、そのまま文章にしてみたところ、書けること書けること。

そしてそんなことを続けていると、どんどんストックができ

「これを本にしてみたい」

と思うようになり、実行に移しました。といっても、もちろん自費出版。小学生の学級文集のような体裁のものではありますが、本の形になった喜びは格別でした。

「美女エッセイ」

と題したその冊子は一冊五百円。もちろん売れなくて、現在押し入れはエッセイ集でいっぱいです。それでも時々買ってくださる方もあり、その方々にはこの場をお借りして改めて御礼申し上げます。

その後ワープロはパソコンへと進化し、写真や資料などを貼り付けることが簡単にできるようになって、ますます書くことが楽しくなっていきました。どんどん書き溜めては自費

出版を繰り返し、ついにＰＡＲＴ17まで出版しました。そして、このタイミングで私はネット上のブログを始め、紙媒体での出版は終わることにしました。（ブログはネットで「西野真理　ブログ」と検索していただけると出てきます）

さて、ある日のこと、知人のＡさんからレターパック郵便が届きました。小冊子と直筆のお手紙が入っていました。内容は

「石川県○○協会が毎年春に出す小冊子に原稿を書いていただけないか？」

というもの。

喜んで書きます。普通なら。

ところが今回それをお断りすることにしました。

理由は下の通り。

①ご依頼くださったＡさんとは、一～二度の面識はあるもののお話したことはない（あったとしても記憶していない程度）

②Ａさんへの連絡手段はお手紙か固定電話

③石川県○○協会をネット検索したところ、お問合せ先は固定電話のみ

ここまでで私の気持ちをお察しいただけましたでしょうか？

Ａさんにお断りするにしても承諾するにしても連絡は電話か手紙。ろくにお話したこともないのに電話はちょっと・・・・すると今回の場合手紙になります。

これが本当に苦痛です。

現在私の連絡手段はライン、メール、ＳＭＳ、メッセンジャー。

また石川県○○協会さんのご依頼を受けた場合、電話でやり取りした上で、封書で原稿提出になる可能性大です。そしてもし原稿の訂正などあった時は、いちいちそれが必要になります。そもそも原稿は来年です。このことを来年の春への原稿まで引っ張っておくのは精神的によろしくない気がします。

そこで早速Ａさんにお断りのお手紙を出してしまうことにしました。もちろん手書きではなく、ワードで。

そして私はこのことをブログに「通信手段に関する愚痴」として投稿しました。

すると数日後、ブログのコメント欄にコメントが届いていました。コメントは以下のとおりです。

「突然の投稿お許しください。ブログでご指摘いただいた石川県○○協会で事務を担当しておりますＢと申します。

（中略）

迷惑メール防止のため当協会のみならず上部団体も含めて印刷物にはアドレスを記載していないことと、当協会の関係者には高齢者の割合が高く、事務担当者としては誠に不本意ながらアナログなやり方を続けざるを得ない

事情についてご賢察いただければ幸いです。
その上で、もし当協会の会報にご投稿いただけるのであればk……o@i……jp宛てにお送りいただければ幸いです」

それに対して私はすぐに次のように返信しました。
「この度はブログをお読みいただき、コメントをお寄せくださり、ありがとうございました。
私のブログには、ほぼ楽しいことや日々のくだらないことを書いていますが、珍しく愚痴を書き、それをまさか関係者の方にお読みいただくことになるとは思ってもいませんでした。しかし、今回はこのようにコメントを頂くこともでき、敢えて書いてみてよかったと思います。
早速ですが、文章はブログを読んでくださっておわかりのとおり、雑談のような文章ならいくらでも書けますが、A様からお送りいただいた貴冊子を拝見いたしますと、きちんとした文章で、私の文章がお気に召すかどうか。
また、発行は来年の春ということで、まだ時間はかなりありそうです。
ご依頼頂ける場合、提出期限や文章の内容等、詳細をお教えいただけると幸いです」

更にBさんからご返信をいただきました
「会報については毎年四月頃に前年度の活動報告とともに愛好家の皆さんからエッセー、小説、童話、詩、短歌、俳句、川柳などをお寄せいただいて構成しています。ジャンルは全く問いませんし、来るもの拒まずで、むしろ原稿集めに苦労しているのが実態です。期日についても西野様はワードで作成してメールに添付されると思いますので来年一月頃までにお送りいただけるとありがたいです。

コメントにも記載しましたが、当協会は高齢者の割合が高く、手書き原稿か、もしくはワードで作成した文章をプリントアウトして送られる方がほとんどです。私の労力のほとんどは、印刷業者に渡すために、手書き原稿をワードで作成し直すことに費やされています（涙）

もしご投稿いただけるのであれば、内容については全くお任せいたしますし、堅苦しく古臭いイメージの会報の幅を広げていただければ幸いです。どうぞよろしくお願いいたします」

……来年一月まで……絶対忘れてしまいます。書きましょう！……というわけで、書いているのがこの文章なのです。

随想　四季を詠じて思うこと

中田　久実子（桃水）
（金沢工業大学）

本気で短歌に向き合い始めて数年、いまだ歌誌の毎月の締め切りを意識しながら詠ずることが多く、湧き出る感興を自然に韻律に載せる理想には程遠い感じだ。ためらいはもちろん、時には捨てきれない衒いがあって、自嘲することしきりである。

しかし、「作らなければならない」という「縛り」を持つことは、四季の風物や日常の出来事を逃さずにおこうという気構えを確かに強くする。そんなこんなの去年今年の拙作を拾い、「暮らしの心」を振り返ってみた。

【迎春】暮れから正月にかけては、「新玉」の文字のごとく心が改まる。

松飾り様々なるを隙間なく掛けて花屋の暮れ神々し
寺町の寺院群なり除夜の鐘重なるを聴きこの年も明く
あらたまの初の眠りはうとうとと子らの寝息を聴く寅の刻
リビングに家族雑魚寝の年の明け寝息聞きつつ雑煮を作る
雪の間の七日正月天神の石の牛撫づ素手の受験子
背伸びして御籤結える受験子の肩に雪間の陽やわらかし

【早春】雪質も変わり、春の扉が開いていく感興が多くなる頃だ。

紅梅の艶めきたるを帳中に秘めんがごとく太平雪降る
春節のランタンのごと雪間なる月に向かいて風花昇る
二月の寒のもどりの綿雪の帽子いただく梅ことごとく
手水鉢椿の花のあふれたる風に一花ゆるりと落ちぬ
尼寺の弥生艶めく木漏れ陽に椿おちこち八重や一重や
何処から来たりしものか小川ゆく椿の落花二つ三つ
川をゆく椿の落花淡々と身をしまいゆく潔きかな
この先は海に落ちんと見ゆる道片方雪割草群生す
田起こしの車上に臥して青年は鳥餌ついばみ終えるを待つや

【桜】日本人にとって桜は「殊なるもの」と、いつも実感する。

やわらかき生後三月の手の中にわが指にぎらるる桜開花日
花筏蕊も絡めてゆるゆると川の真中の鳥を運べり
花のまま落ちるもありてゆるやかに川面を埋めて花筏ゆく
車行くたびに花びら吹だまる桜色濃き路辺の真昼
満開の桜の見事語らんと押す車椅子の母安眠
幼な子のほどでしかなき母の手をわが手で包み花見むさぼる

【夏】新緑→梅雨→盛夏→晩夏…移ろう夏にそれぞれの感

興がある。

青天にひこうき雲の交差するみかん畑の花盛りの朝
風やさしみかんの白き花まぶし目とじて香を数度たしかむ
山を背に数十株の香り立つ芍薬郷よと真中にしゃがむ
気丈さはわれの値打ちと抗うも足腰ままにならぬ梅雨入り
中腰でレタスの畝にネット張る友は農婦と知る梅雨晴れ間
数百の風鈴下がる御社の廊に立ち居て音を遊びぬ
旧盆の花も供物もそれぞれに皆新しき過疎村の墓所

【秋】秋は諷詠の情景や風情に事欠かない「殊なる」季節だ。

枝打ちし足高杉の屋敷林越し金色に稲波打つが見ゆ
新米の炊き上がりたる艶々と　しばらくは湯気にその香りを聞けり
ポリフォンのディスクの響く山間のラベンダー園いよよ色濃し
家持の愛でたる山に昼餉摂る知らぬ同士のそれぞれの秋
人足のまばらになりしバラ園の律の調べに渡る鳥聴く
月食を見上げる帰路にドビッシー流れくる聴く枯葉踏みつつ
待宵に枝影さみし柿に生る二顆の朱色のことさらに冴ゆ
白山の麓の友を訪ねきて照葉を駆ける猿に出会いぬ
腹太き蟷螂照葉の室に居りさながら武則天の降臨
軒下の一枝紅葉残しけり時雨の続く山宿の朝

【冬】北陸の冬、人は五感をフル稼働させられる。

山茶花のマゼンダ色の垣の下　主と子犬と白き息吐く
家も木も大き霰に打たれおり　第九に勝る荘厳な夜
朝露に冴える葉色の初採りの冬大根陽に高く掲げる
托鉢の大根始末する老僧の節太の手の技の確かさ
気嵐に裾奪われて立山の峰大寒の空に浮かべり

【コロナ禍】当たり前にあることのかけがえのなさを痛感した。

身の内の邪悪全てを吐かんとてウルフムーンや子は咳をする
そばに居て世話はならぬと強いられる遣り切れなさに冬至粥炊く
無事であることの重みを痛感す　コロナの日々の卓の広さよ
諍いも小言も生活の豊かさぞ　それぞれの椀懇ろに拭く

【母】斎藤茂吉の御母堂の歌を思わないではいられない。

年明けは白寿を祝う指切りの力のあるを幾度も確かむ
白寿なる母発熱と施設より知らせありしも気ばかりを揉む
聴き取れぬ母の話のもどかしき　そを訳し得る機器はあらずや
孫娘落涙するに愛しさを隠す術なく顔崩す老母
肩も背も足も手指もわが母と今生の限りのごとく撫づ

自分の書画を友禅染したいと中村高雲氏に師事したのも短歌に向き合い始めたのと同じ頃であった。

「特選を得し歌の載る月誌着く　弥生満月愛酒独酌」と詠えるような評価も頂け、「旧友も来年古希と鬢を撫づブルマンの香のサイフォン湧きつ」と記せる旧知もいて、幸せなことだと感謝している。

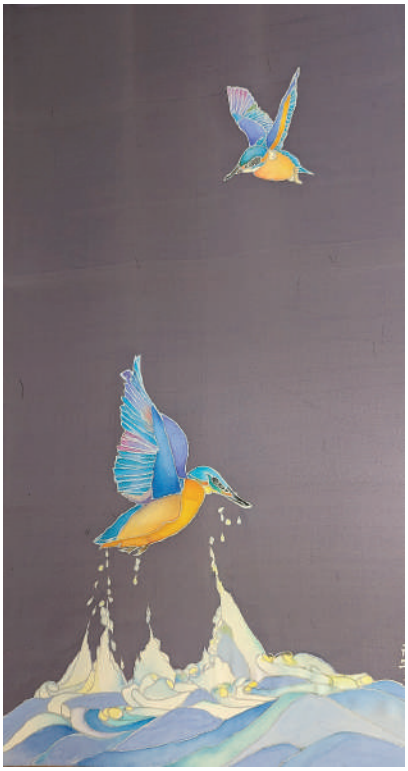
たくさんの支えをもらい、次は詠歌で高評価をもらった、愛する「カワセミ」を友禅染めしたいと熱くなっている。

落石の逆さ紅葉を破るごと川蝉（かわせみ）は餌を咥えてぞ去る

求愛の餌を捕るオスはまさしくも魚狗（かわせみ）となり水面射抜く

水面に触れなんとする枯れ枝に翡翠（かわせみ）のいる時の静けさ

息を呑み翡翠マニヤ時を待つ撮ることもはや忘れなんかな



編集後記

鈴木隆史

ようやく五類移行したコロナの存在を意識することなく活動が可能になった二〇二三年度において、思いもよらぬ激動に巻き込まれるとは想像もしていなかった。

二〇二三年十月十七日、十代大樋長左衛門、大樋陶冶斎名誉顧問が九十五歳の天寿を全うされた。氏は一九六七年（昭和四十二年）の勤文協結成準備会に始まり、翌一九六八年（昭和四十三年）勤文協設立総会において会長に就任されると、二〇二二年（令和四年）にご子息の十一代大樋長左衛門氏にその席を譲られるまで、同じく昨年二月に百歳で急逝された氷田清風名誉顧問と共に勤文協活動の顔となり、活動を牽引していただいた。一年を置かずして二人の創立者を失ったことは、やむを得ないこととはいえ大きな喪失感を抱かざるを得ない。

そしてようやく喪も明けようとした二〇二四年元日、言うまでもなく石川県民にとって未曽有の大災害が発生した。しかも一部の例外を除き、能登と加賀では全く別世界の如き生活実態の断絶が生まれ、ほとんど変わらぬ日常がある一方で、生活の全てを失った住民が一月一日から時が止まったまま絶望の淵に沈んでいる姿を目の当たりにしている。運命という言葉の残酷さと苛烈さを今ほど痛感させられる時はない。

勤文協も社会的な組織である以上、この激動から無縁でいられるはずもない。特に、ここ数年財政的に困難を抱えつつあることは、この編集後記を通じてこれまでもお伝えしてきたところではあるが、今回の震災がそのマイナスの状況をさらに急加速させることは否定しがたい。四月から始まる二〇二四年度は、実は勤文協の収入の過半を占める自治体からの補助金の交付が不透明な中で活動計画を組まざるを得ず、しかもこの状況が単年度で終息するとは到底考えられない。

こうした状況を踏まえ、とりあえず二〇二四年度については写真サロン展と初めての試みである夏の美術展、そして中核的事業である勤労者美術展の三つを開催し、さらに翌年度は年前半に夏の美術展、年後半に勤労者美術展という年二回の開催パターンに移行せざるを得ないと現時点では判断している。一年の活動を振り返り記録するという意味では会報の重要性も変わるものではなく、規模を縮小してでも存続させるべく努力していきたい。

無担保 ろうきん ご来店不要！時間も節約！
Webローン
ろうきんローンは
お申込みからご融資まで
Webで完結！
いつでも、カンタンね！
※北陸ろうきんの普通預金口座をお持ちでない方は、
ろうきんアプリ口座開設や店頭にて口座開設をしていただく必要があります。
お店へ出かけなくても申込みできるよ！
書類の記入が不要だから、手続きもスムーズ！
申込みはとっても簡単ね！
24時間365日いつでもOKね！
WEB
Web自動車ローン
【ご融資金額】最高1,000万円【ご返済期間】最長10年
【適用金利】固定金利▶年2.4% 変動金利▶年1.7%
Webフリーローン
【ご融資金額】最高1,000万円【ご返済期間】最長10年
【適用金利】固定金利▶年5.7% 変動金利▶年4.525%
Web教育ローン
【ご融資金額】最高1,000万円【ご返済期間】最長20年
【適用金利】固定金利▶年3.675% 変動金利▶年2.2%
Web リフォームローン+α
【ご融資金額】最高1,000万円【ご返済期間】最長20年
【適用金利】変動金利▶年1.7%
Web マイプランカードローン
【ご融資限度額】30万円/50万円/100万円
【ご返済方法】毎月返済または毎月ボーナス併用返済
（ご融資限度額による）
【ご融資金利】変動金利▶ 会員組合員の方…年4.8%～年6.8%
生協組合員の方…年5.0%～年7.0%
一般勤労者の方…年6.5%～年11.5%
※上記金利は、2024年2月1日現在適用中。※お申込みいただける方は、原則勤続1年以上で最終ご返済時の年齢が満76歳未満の勤労者に限ります。※満20歳未満の勤労者の方のWebマイプランのお取扱いはしておりません。カードローンのお申し込みは、ろうきん各店舗またはローンセンターにてご相談ください。※保証料はろうきん負担です。ただし、Webマイプランは金利に保証料が含まれます。※Webローンのお一人様の総借入限度額は1,000万円以内となります（Webマイプランは除く）。また、無担保融資のお一人様の総借入限度額はWebローンも含めて2,000万円以内となります。※お使いみちは、事業資金、投機目的資金、負債整理資金を除きます。※返済条件を変更された場合、別途手数料が必要となります。※審査の結果、ご希望に添えない場合もございますのでご了承ください。※ご相談・お問い合わせは、最寄りの〈ろうきん〉まで。
北陸ろうきん

こくみん共済 coop NEWS
「たすけあいの輪をむすぶ」
こくみん共済 coop は、次のステージへ
こくみん共済
団体生命共済
火災共済
自然災害共済
総合医療共済
せいめい共済
マイカー共済
自賠責共済
交通災害共済
新セット移行共済
公式キャラクター ピットくん
こくみん共済〈全労済〉
全国労働者共済生活協同組合連合会 coop
たすけあいの輪をむすぶ
「こくみん共済 coop」は営利を目的としない保障の生協として共済事業を営み、相互扶助の精神にもとづき、組合員の皆さまの安心とゆとりある暮らしに貢献することを目的としています。この趣旨に賛同いただき、出資金を払い込んで居住地または勤務地の共済生協の組合員となることで各種共済制度をご利用いただけます。

「石川県勤文協会報」（No.45）

発行日　二〇二四年三月三一日

発行者　石川県勤労者文化協会

（事務局）金沢市西念三丁目三番五号
石川県勤労者福祉文化会館
TEL（〇七六）二三一―一七四六番

発行責任者　十一代大樋長左衛門（年雄）

編集者　笠間英雄
酒井一吉

印刷者　株式会社 橋本清文堂